

江戸の正月...江戸っ子のはずの私は庶民であるが、どうも武家の生活をしているらしい。食事処で「はああ？」という内心驚いた口調の返事をもらって庶民の定番メニューを頼まなかったことに気付いた。ついでに食後に禁断症状のようにコーヒーを飢渴してカフェに飛び込んだ。余談だがいつか旅行で山奥のホテルに泊まった時は大変だった。寝る前にコーヒーが飲みたくなかったが、ホテルのレストランやバーはすでに閉店。東京では当然ある自販機がないことに愕然として未練を残し翌朝7時までひたすら耐えた。それくらいコーヒーは必需品で、日本茶はどこかで出されたときだけしか飲まない。このことに端を発して江戸時代の正月はどうだったのだろうか？と調べてみると、庶民は年越しそばを食べ除夜の鐘を聞き（12/31にやってくる神様と共に）初日の出を拝み一元日は寝正月だったようだ。そして武士はというと元日に挨拶回りをするために大みそかは早く休み、2日が休みだったようだ。何だか年々正月の形態も変わってきているが、私は今年の「元日だけ休み」が今年は「2日が正月」的になっている。どちらにしても「今年もマメに動けますように」と黒豆だけは欠かさず食べる。

さて、例年欠かしたことの無いものといえばウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサートの映像鑑賞である。現地では特別なツテがなくては地元民でもチケットが取れないのは昔から変わらない。私は衛星中継が始まる前からT.V.で見ているのだが、今年の指揮者はオーストリアのリンツ出身でウィーン国立歌劇場音楽総監督：フランツ・ウェルザー＝メスト氏だった。即ち丸々地元集団。そのせいか雰囲気は例年より柔らかかったように思う。1960年生まれということもあるかもしれない。それを感じたのは軽快な『おしゃべりポルカ』、今までの清冽的雄大さではなく、まさに乗船しているときの波と風の動きのようなワクワク感とうっとり感があつた『美しき青きドナウ』、そして今まで殆ど勇ましかつた『ラデツキー行進曲』には「おかえりなさい」と迎える声が聴こえるような温かさを感じた。また今年は殆どが新しく取り上げられた曲で、生誕200年必須プログラムであるワーグナーとヴェルディの曲とシュトラウスのカドリーユ(4組の男女が四角くなって踊る舞曲)の関係もあつたかもしれない。そして会場には何とヨーゼフ・シュトラウスの曾孫にあたる90歳を超えたご婦人がいらした。またバレエで登場した木本全優(Kimoto Masayu)さんはウィーン国立バレエ団の準ソリストだそう。そして舞台裏の指揮者の様子を映したのは興味深かつた。さらに白状すれば天井のカメラが後ろ側から客席を捉えるたびに、私は整然と箱に並ぶチョコレートをおい浮かべた。タキシードの黒や赤いドレスはチョコレートの包装紙か。もとい茶系とゴールドでまとめられた室内が美しい。会場を飾った花は例年通りイタリアから運ばれたものだが、飾り付ける人の中に日本人女性がいたのも驚き。どうしてもやりたくて飛び込み交渉して参加し、以後継続参加を認められたそう。心底願えば叶う素敵なお話。世界の場で日本人が活躍しているのを見るのは嬉しい。

さて、元日の朝には頭に「アドリアーノ・バンキエーリ」の名前が浮かび、2日の朝には「アルフォンソ I 世」(どなただったかしら？調べました)の名がやってきた。江戸っ子性格テストは5設問全て当てはまるのに、ついに生活が江戸からブツ飛んでしまった私は金持ちではない「宇宙人」になる日も近いかもしれない。次のウィーン・フォルクスオーパー交響楽団の演奏で地球に踏みとどまることを願おう。(2013.1.2)